

第7章

本事業に対する評価等



1 管理官報告

第45回「東南アジア青年の船」事業

管理官 山谷英之

(帰国報告会(平成30年12月12日)における報告に加筆修正)

※ 船内でインフルエンザが発生したため、各国それぞれ、ナショナル・リーダー、ユース・リーダー、アシスタント・ユース・リーダーの3名のみの出席の下、にっぽん丸内ドルフィンホールにおいて帰国報告会が実施された。なお、その他の参加青年は、テレビ放映により船室で報告会を視聴した。



1. はじめに

まず始めに、インフルエンザ発生のため、参加青年の皆さんが、この活動状況報告をキャビンで聞くことになったことは大変残念に思います。

第45回「東南アジア青年の船」は、本日、ここ東京に戻って来ることができました。今年は、ブルネイ、フィリピン、タイ、ベトナムに寄港しました。日本でのプログラムを含めて、約50日間のプログラムで、参加青年たちは所期の目標を達成し、成果を確実に手にしたと信じています。

それでは、これから、日本国内活動、訪問国での活動、船上既参加青年の集い、船内での活動の順に説明いたします。

2. 日本国内活動

参加青年が一堂に会したのは10月24日でした。この日に参集式を行い、翌25日から29日まで、11の県(山形県、福島県、栃木県、神奈川県、山梨県、新潟県、長野県、愛知県、奈良県、岡山県、山口県)に分かれて、地方プログラムを実施しました。それぞれの県で、地元青年との交流、ホームステイなどを通じて、ASEAN各国の青年にとって日本を知る良い機会になったと伺っています。また、この機会に日本参加青年は、ASEAN各国からの青年をもてなす貴重な経験を積むことになりました。

10月30日からは東京に滞在して、ディスカッションのテーマに即した課題別視察を行ったほか、駐日ASEAN各国大使館等の御協力の下に、文化交流プログラムが行われました。この段階で既に参加青年の間に国を超えた友情の輪が広がっていることに目を見張りました。また、31日には、各国ナショナル・リーダー(以下「NL」という。)、ユース・リーダー(以下「YL」という。)、アシスタント・ユース・リーダー(以下

「AYL」という。)が、秋篠宮同妃両殿下に御引見いただくとともに、安倍内閣総理大臣への表敬の機会をいただき、温かい励ましのお言葉をいただきました。

3. 訪問国活動

今年の事業では、ブルネイ、フィリピン、タイ、ベトナムに4日間ずつ寄港し、2泊のホームステイを実施したほか、課題別視察、地元青年との交流、表敬訪問などを実施しました。

(1) ホームステイ

ホームステイでは、参加青年は、宗教や民族による価値観の違いに戸惑いながらも、各家庭との深い人間関係を築くことができました。出航の際に、参加青年がホストファミリーと別れを惜んでいる光景を私は今でも忘れることができません。参加青年の感想を聞くと、ホームステイは、全体的には好評でありました。しかしながら、個別の事例の中には、宗教的な理解を欠く事例(食物、飼犬の問題など)やホームステイの趣旨を理解していないと考えられる事例があることが報告されており、ホームステイの趣旨等の徹底を図っていく必要があるように思いました。

(2) 課題別視察

課題別視察では、公的機関や団体、大学などを訪問し、船内でのディスカッションのテーマについての情報収集や地元青年等との交流を行いました。

ベトナムにおいて、私は、地元のメディアに行きましたが、業務説明の後、参加青年がグループに分かれて、自ら行いたい広報テーマや広報の媒体を検討して発表し、メディアの幹部の皆さんと意見交換を行いました。参加青年にとっては、メディアのプロに対してプレゼンテーションを行い、意見交換を行うという貴重な経験を得たと思います。

(3) 表敬訪問等

ブルネイでは、各国のNLがハサナル・ボルキア国王陛下の拝謁を賜ることができました。当日は、お会いするだけではなく、着席してご懇談を行う時間もいただきました。タイでは、参加青年全員でアナンタポン・カンチャナラート社会開発・人間安全保障大臣を表敬し、励ましの言葉をいただきました。

また、各国で心のこもった歓迎会等を催していたでき、多くの高位の方から歓迎の言葉をいただくとともに、訪問国の音楽や踊りを体験することができました。参加青年もスピーチを行ったり、パフォーマンスを行っ

たりするなど、参加青年全体あるいは自国を代表して行動するという青年大使の役割を立派に果たしていたと思います。

(4) フィリピンにおけるダバオ市訪問

フィリピンでは、フィリピンのNL、各国のYLが、この事業では初めて、ダバオ市を訪問し、大歓迎を受けました。訪問冒頭の歓迎昼食会では、第39回SSEAYPフィリピンNLである、マベル・アコスタダバオ市議会議員が主賓として出席され、歓迎のお言葉をいただくとともに、当時の話を伺いました。その後、治安・安全指令センターの訪問、マラゴス公園での既参加青年との交流を行いました。夕食歓迎会では、既参加青年も多数出席されて盛大な会となりました。

4. 船上既参加青年の集い

各訪問国では、にっぽん丸において船上既参加青年の集いが行われ、多くの既参加青年が懐かしい船に乗り旧交を温めました。訪問国の既参加青年だけでなく、多くの他国の既参加青年も国境を越えて参加していました。既参加青年の中には、SSEAYP初期に参加した人たちも含まれており、SSEAYPの歴史を感じるとともに、既参加青年によるASEAN各国の国境を超えたネットワークの強さを感じました。

5. 船内活動

(1) ディスカッション活動及び事後活動セッション

ディスカッション活動は、最後の訪問国であるベトナムまで行われました。

参加青年は、「青年の社会活動への参加」を共通テーマとし、その下で8つのテーマ別に分かれて、各国の状況の理解を深め、共通の課題について意見交換を行い、その結果を発表しました。その後、ディスカッションの成果をいかに効果的に社会に還元できるかを考え、問題解決のための行動の計画と実践に必要な具体的なスキルを身に着ける学習を行いました。ここまでの活動は、参加各国から公募された8名のファシリテーターが、参加青年を熱心に指導・支援しました。

ベトナム出港後は、参加各国の事後活動組織から派遣された代表者により事後活動セッションが行われました。インフルエンザの発生により、時間が限られましたが、事後活動組織代表者とNLからのアドバイスを受けながら、国ごとに具体的な活動計画の策定へと発展させました。

(2) ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーションは、国ごとに、歴史、文化、国民性、現在の青年を取り巻く環境など様々な角度から自国を紹介するものです。

それぞれの発表は相当時間をかけて準備したことがうかがえ、見応えのあるものでした。私自身多くのものを学びましたが、参加青年は、他国の文化等を学ぶ良い機会であったのみならず、発表に至る準備や練習を通じ、自国文化の多様性について学ぶ良い機会になったのではないかと思います。

(3) PYセミナーなど

このほか、船内活動や訪問国活動の単位であるソリダリティ・グループによるレクリエーション活動や参加青年の自発的な活動であるPYセミナーや自主活動が行われました。PYセミナーや自主活動においては、1人又は数人の参加青年が自主的に企画した、各国文化にちなんだ多彩な企画や社会問題に関する講義・討論などが行われました。このような場を通じて参加青年は各国の文化をより深く知るとともに、セミナーを企画して実施する中でリーダーシップスキルを身につける経験を積むことができたと思います。

6. 事業全体を通しての所感

一番強く感じられたのは、「東南アジア青年の船」事業が各国でいかに高く評価されているかです。いずれの訪問国でも大歓迎を受けました。非常に高い地位の方が式典に出席してくださったり、表敬を受けてくださったりました。記者会見には、多くの記者の方がいらっしやいましたし、実際にもたくさんマスコミで取り上げられたようです。そして、日本政府に対する感謝の言葉を何人もの方から頂きました。

また、この事業がいかに既参加青年に影響を与え、また、愛されているかも肌で感じました。既参加青年を中心として構成された受入委員会の方々にはいずれの国でも大変良くしていただきました。各訪問国の船上既参加青年の集いでは、多くの既参加青年が参加してくれました。訪問国でない国の方もたくさん出席されていることに、私は驚きました。去年参加したばかりの人から何十年も前に参加した人まで、世代を超えてたくさんの人たちがいらっしやって、この事業に対する思いや当時の思い出話を聞かせていただきました。ブルネイで私が訪問した視察先では、ブルネイが初めて参加した年の既参加青年にもお会いすることができ、この事業の歴史を感じることができました。

7. おわりに

本年度も、このプログラムに対して多くの方から多大なるご支援、ご協力をいただきました。各国政府・大使館関係者、受入委員会、既参加青年、ホームステイ家族、視察先の皆様、その他事業に関係された方に対して感謝申し上げます。

私自身は、このような事業は初めてであることに加え

て、英語能力も高くなく、不安もありましたが、たくさんの方に支援いただき、何とか最後まで管理官を務めることができました。NL、ファシリテーター、事後活動組織代表者、また、管理部門も皆、参加青年を熱心に指導いただき、事業の実施に大変貢献していただきました。改めまして、お礼を申し上げます。

また、40日間、快適な航海ができたのも、二宮船長をはじめ、クルーの皆様が我々が気づかないところでお気遣いをいただいたたまものと思います。私は、40日間過ごした、この「にっぽん丸」が我が家のように思えて、下船を寂しく思います。この場を借りて感謝を申し上げます。

参加青年のみならず、日本国内活動を含めて、約50日間の事業を終えられたことをお祝い申し上げます。

この50日間、言わば「青年大使」として、国籍が違う人々と出会い、生活を共にし、ディスカッションをしたりするとともに、異文化に触れるという、自国での生活では得られない貴重な体験をしたと思います。各地で「Life Changing」という言葉を聞きましたが、まさに人生が変わるという思いをしている参加青年も多いと思います。

私自身は、最初に皆様とお会いした日の各国チアーを見て、皆様のパワーに驚きました。船内でも、熱心にディスカッションに取り組む姿や、ナショナル・プレゼンテーションでの見事なパフォーマンスに圧倒されました。今回の旅の体験で、皆さんはこれまで以上に、パワーアップされたことと思います。この旅で得た知見やネットワークを大事にして、各地で事後活動に励んでいただくとともに、ASEANと日本の各国の間の相互理解と友好の架け橋になることを期待しています。

第45回「東南アジア青年の船」事業は本日で終了しますが、皆さんの活動は今日から始まります。

日本での歓迎レセプションで、インドネシア参加青年代表のAdrianさんは、「私たちはアジアの未来です。私たちが世界、特にアジアを築いていく責任を担っていることを自覚しています。」と言いました。私にもこの言葉を使わせてください。「皆さんはアジアの未来です。」皆様が、将来にわたって、国際的な場面で、あるいは、皆様が住んでいる各地域で活躍されることを私は確信しています。

どうもありがとうございました。また、お会いしましょう。

2 参加青年による事業評価

参加青年等に対してプログラム終了時に事業評価アンケートを実施した。集計結果は次のとおり。

注：対象は、ナショナル・リーダー11名、参加青年314名。

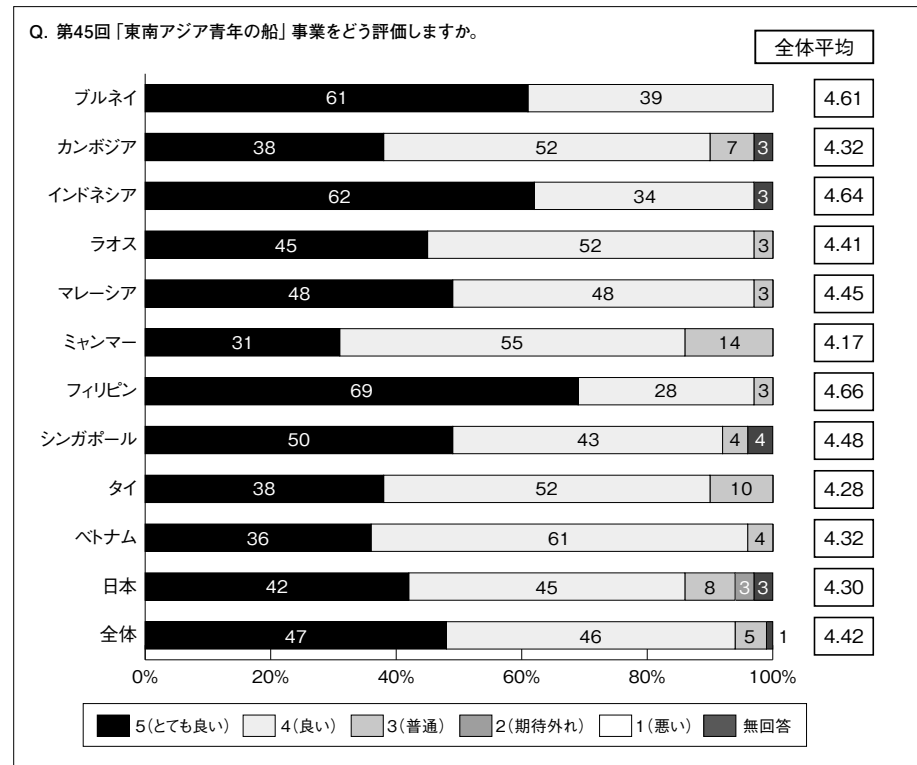
値は小数第一位で四捨五入されている。

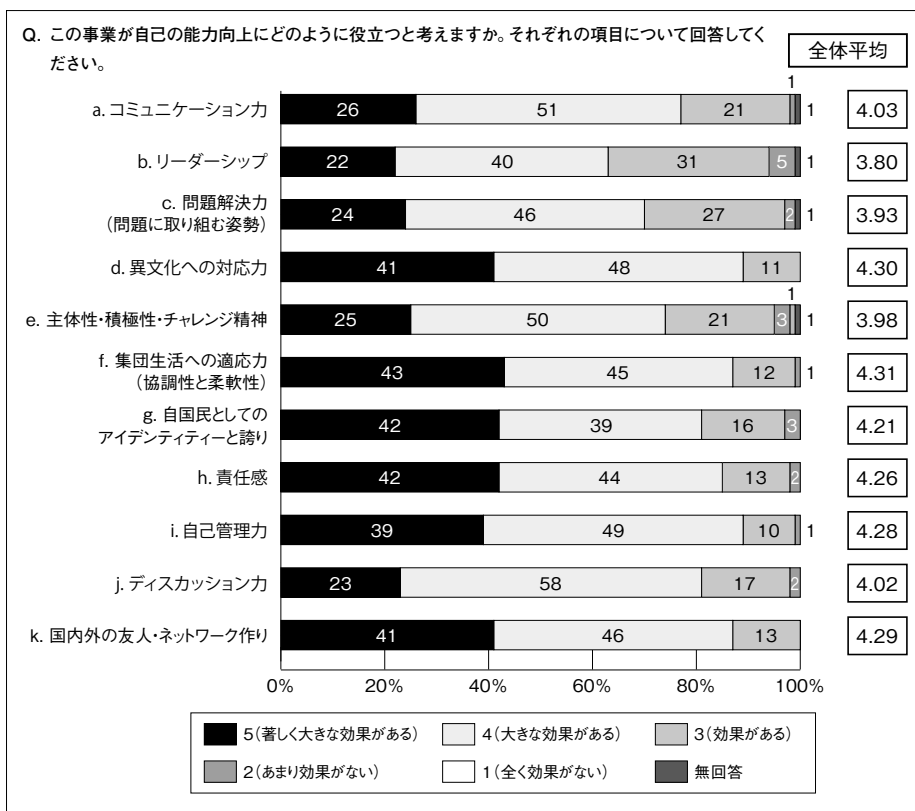
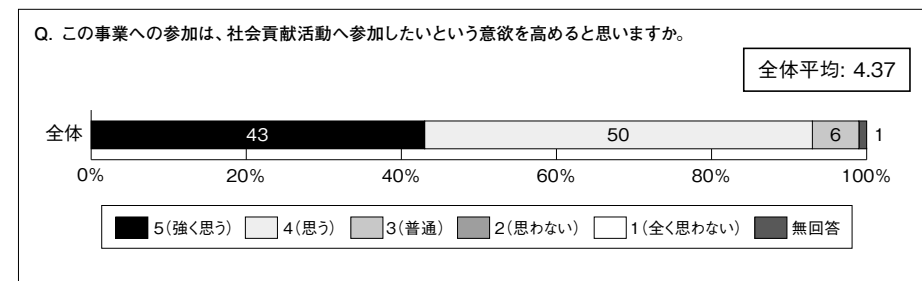
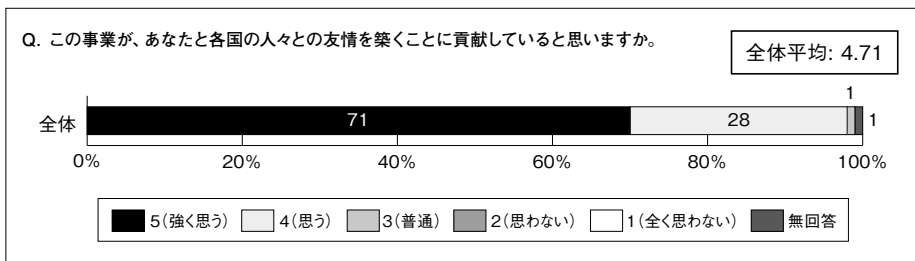
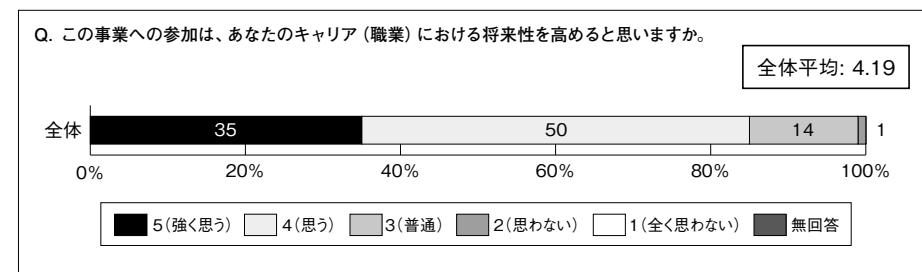
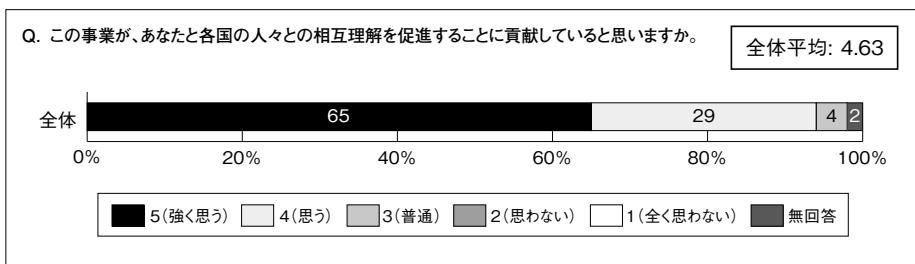
統計処理上、合計が100%にならないことがある。

[事業全体]

事業全体に関しては、全体平均は4.42で、93%の参加者が4以上（良い、とても良い）と評価した。

この事業が各国からの参加者間の「相互理解を促進すること」及び「友情を築くこと」に貢献していると思うかとの問いに対し、それぞれ94%、99%が4以上（思う、強く思う）と評価した。また、この事業が自己の能力向上にどのように役立つと考えるかとの問いに対し、「異文化への対応力」、「集団生活への適応力（協調性と柔軟性）」、「責任感」、「自己管理能力」及び「国内外の友人・ネットワーク作り」に関して、86～89%の参加者が4以上（大きな効果がある、著しく大きな効果がある）の評価をした。

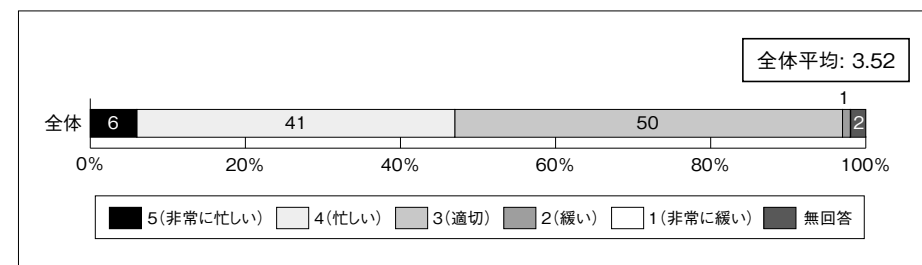




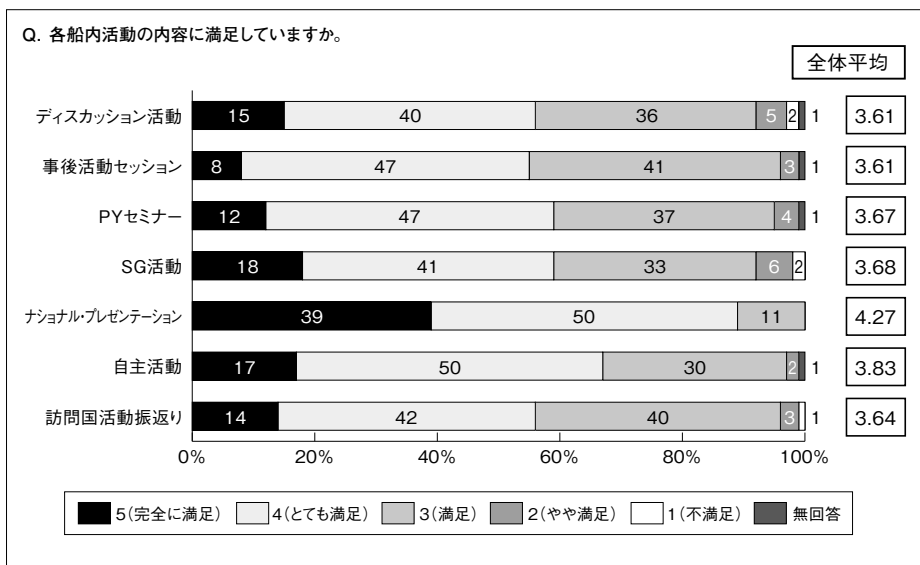
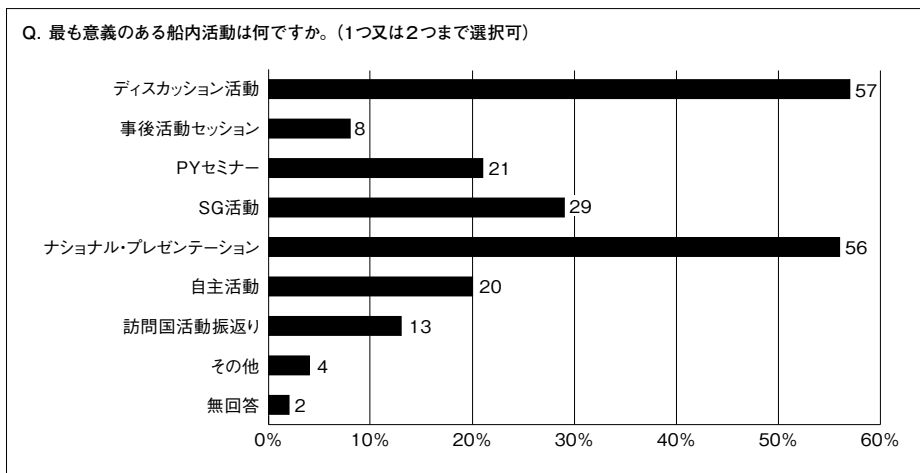
[船内活動]

Q. 船内活動の日程についてどう思いますか。

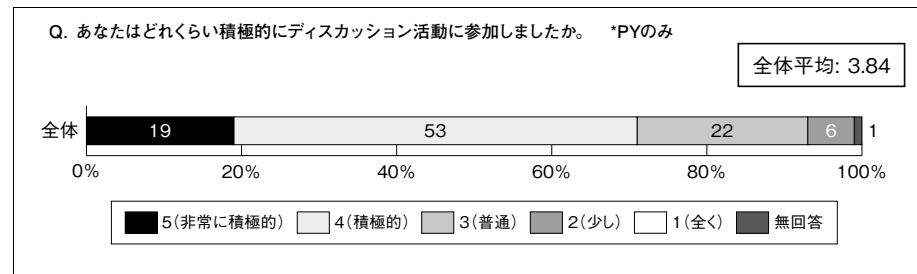
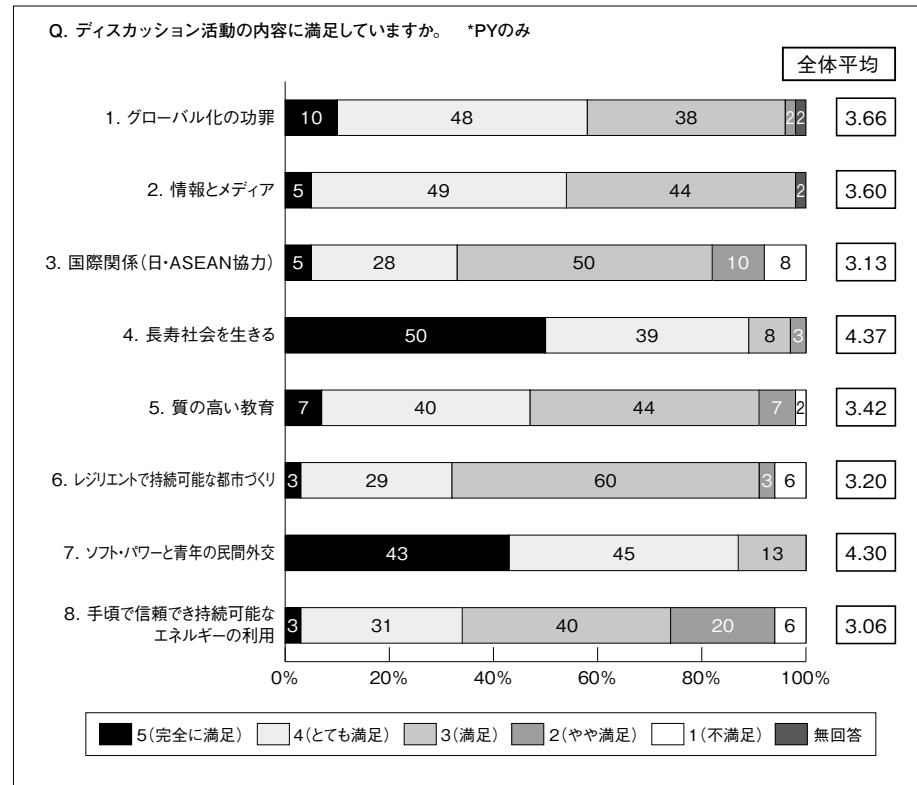
船内活動の日程について、50%の参加者が3 (適切) と評価し、47%が4以上 (忙しい、非常に忙しい) とした。



船内活動について、「最も意義のある船内活動」として参加者が選択（1つ又は2つまで選択可）したのは、多い順に、ディスカッション活動（57%）、ナショナル・プレゼンテーション（56%）となった。一方、それぞれの船内活動の内容についての満足度は、全体平均の高い順に、ナショナル・プレゼンテーション（4.27）、自主活動（3.83）となった。



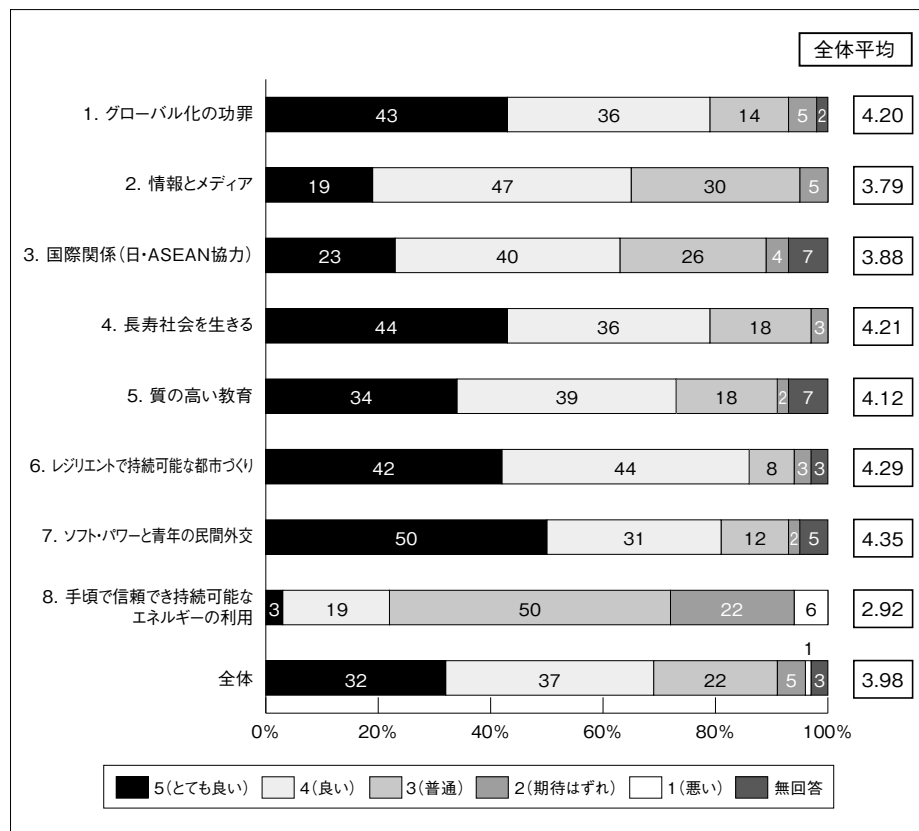
[ディスカッション活動]



[日本及びブルネイにおける課題別視察]

Q. ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、日本における課題別視察をどう評価しますか。

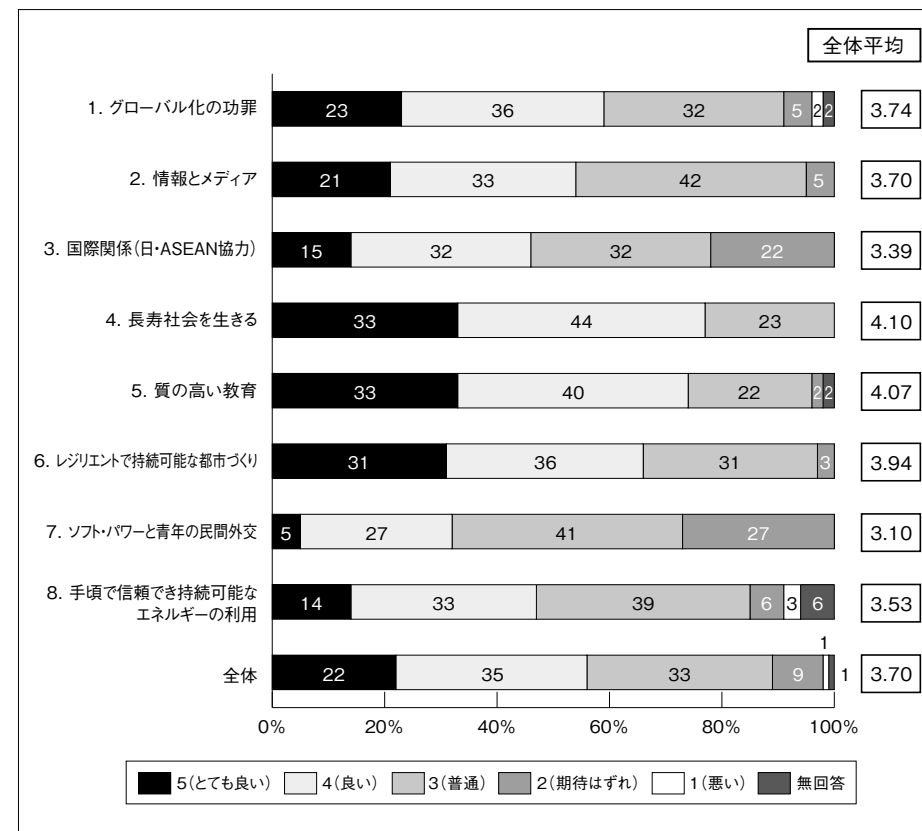
ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、日本における課題別視察に参加した青年の69%が4以上(良い、とても良い)と評価した。



- DG1: 独立行政法人日本貿易振興機構、特定非営利活動法人開発教育協会
- DG2: ヤフー株式会社
- DG3: 国際機関日本アセアンセンター、独立行政法人国際協力機構
- DG4: 社会福祉法人江東園
- DG5: 東京学芸大学附属国際中等教育学校
- DG6: 三井不動産株式会社
- DG7: 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)、東洋大学
- DG8: 千葉商科大学

Q. ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、ブルネイにおける課題別視察をどう評価しますか。

ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、ブルネイにおける課題別視察に参加した青年の57%が4以上(良い、とても良い)と評価した。

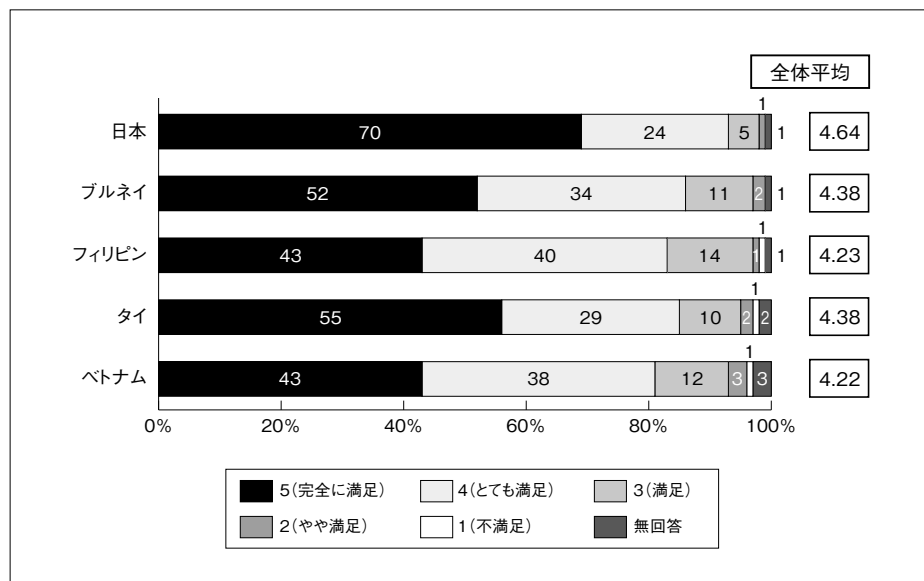


- DG1: ブルネイ・ダルサラーム大学リーダーシップ・イノベーション研究所 (ILIA)
- DG2: 首相府情報局
- DG3: 外務省
- DG4: 文化青年スポーツ省地域開発局高齢者活動センター
- DG5: 教育省
- DG6: 開発省水上集落
- DG7: 文化青年スポーツ省歴史センター、言語・文学局
- DG8: 資源人材開発産業省

[ホームステイ]

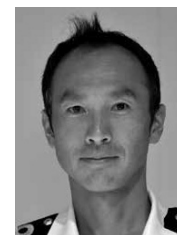
Q. ホームステイはどうでしたか。

全ての訪問国において、81~94%が4以上(とても満足、完全に満足)と評価した。



3 船長あいさつ

につぼん丸船長
二宮 悟志



船長としてPYの皆様と初めて顔を合わせたのは、出航日の船長紹介の場でした。その時、皆様の様子は初めての長い船上生活への不安なのか、式典のためか、多くの方が緊張している様子でありましたが、皆様の国の言葉で挨拶だけさせて頂いた際、私の分かりにくい発音でもそれぞれ笑顔で応えてくれました。その時の事が今でも昨日の出来事のように感じています。

11月2日多くの人に見送られながら東京港を出港、ムアラへ向かいました。東京湾を出るとにつぼん丸は少し揺れ始め、PYの多くは、初めての船酔いを経験したのではないのでしょうか。この船酔いの経験が後に船内でジョークとしてよく使われていましたが、このジョークは45thのPYだけでなく、どの代のPYにも通じるジョークですので機会があれば使ってみてはいかがでしょうか。きっとにつぼん丸での楽しかった思い出話が更に盛り上がるでしょう。ルソン島に近づくと海も徐々に穏やかになり、ナショナルプレゼンテーションも始まりました。船内での各活動も活発になり、航海始まりから数日は、自由時間に見かけるPYのグループは同じ国同士の仲間だけでしたが、この頃には色々な組み合わせのグループを見かけるようになってきたと感じました。

11月10日には最初の寄港地であるムアラに寄港、東京を出てから8日間ですが皆さまにとりましては、とても長い8日間に感じた事でしょう。初めて一週間以上、陸から離れた生活、そしてWi-Fiのない不便さが辛く感じたかもしれませんが。3泊4日のブルネイでの訪問国活動を終えにつぼん丸に帰ってきた時、まるで自宅に帰ってきた時の様にホッとしたように見え、皆様がつぼんに馴染んできたのだと思いました。

11月13日ムアラを多くの人達に見送られながら出港、この後マニラ、バンコク、ホーチミン市へ寄港いたしました。各港間の航海日数が3~4日であったので時間が経つのが早く感じられた期間でありました。

各寄港地におきましてはPYの皆様が訪問国活動中にリユニオンパーティがつぼん丸船内で実施されました。このパーティに参加させて頂きまして改めて本事業の重要性・素晴らしさ感じたような気がします。バンコクにおきまして、につぼん丸2世時代に参加された方から前年度参加青年まで幅広い世代において本事業で築いた交友関係、それ以上の関係が今もお続しており、その深い信頼関

係のようなものに感動いたしました。ムアラ・マニラ・ホーチミン市におきましても、寄港地国内在住の方だけでなく他国からわざわざリユニオンパーティのために来て下さった方、本事業に参加した経験もあって現地でも仕事をしている方、本事業に参加してから30年40年経ってもバッチメイトと共に参加して下さった方々など、ex-PYの皆様と会って話を聞くたびに本事業の意義・素晴らしさを実感したような気がします。今回本事業に参加したPYの皆様もきくと45thバッチメイトとの友情などが長きに続き再びにつぼん丸でお逢いできるのではと思っています。

各寄港地間の航海中には各国のナショナルプレゼンテーションが行われましたが、どの国のプレゼンテーションも素晴らしく、短い期間でこれだけのプレゼンテーションを仕上げたと感じ致しましたし、各国ともPYの団結力の強さを感じました。ナショナルプレゼンテーションを終えた後一つの事をみんなでもやり遂げた達成感を感じたのではないのでしょうか。

12月5日最終寄港地であるホーチミン市におきましても多くの方の見送りを受け日本へ向け出港、日本まで7日間の航海となりましたが、往航の東京-ムアラの航海の時とは全く反対に7日間が短く感じられたのではないかと思います。

バシー海峡に近づくと揺れも大きくなりましたが、揺れの大きさに船酔い者が少なかったと思います。この頃になるとこの航海が終わってしまうと言う寂しさが出てきたのではないのでしょうか。東京帰着の前日は「富士山を見たい」というPYの要望に応えられるように駿河湾へ寄ってみました。あいにくの雨で要望に応えられなかった事は私にとりまして、今航海の唯一の心残りです。

12月12日東京港に帰着、今航海を事故等もなく無事に終了いたしました。

今航海中、船内運営を適切に行い平成30年度「東南アジア青年の船」事業(第45回)を成功に導いた管理官並びに管理部の皆様、内閣府並びに日本国際青年交流機構等の方々、および各寄港地にてご協力いただいた関係者の方々に、深く感謝を申し上げます。そして、PYの皆様、につぼん丸での43日は人生の中では短い時間でありましたが、この短い時間でも友情・信頼・尊敬等が生まれたならば幸いです。しかしながら、今航海が楽しかった。良い経験をしたのでは終わらせず、今回得られた事や経験を今後の皆様の人生および各参加国のため、または世界の人のために役立て頂ければと願っています。

皆様とまたにつぼん丸でお会いできる日を楽しみにしております。

ごきげんよう。